

車いす利用者のスポーツ観戦者行動に関する 基礎的研究

-スタジアムの環境要因に着目して-

丸山 虎徹

第1章 研究の背景と目的

2011年に施行された「スポーツ基本法」は、障害者が自主的・積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類や程度に応じた配慮が推進されなければならないことを定めている。また、文部科学省が2012年から5年ごとに策定するスポーツ基本計画では、スポーツのかわり方を「する」・「みる」・「ささえる」の3観点から推奨しており、特に2022年施行の第3期計画では、「誰もがアクセス」できる横断的な取り組みが強調されている。これを受け、2025年の改正スポーツ基本法では、「する」・「みる」・「ささえる」に「あつまる・つながる」が追加され、スポーツを「人を幸せにする社会的インフラ」として位置づけ、共生社会の実現とインクルージョンの推進が掲げられた（PROSPO, 2025）。障害者スポーツに関する研究は、「する」スポーツの実施率や意識調査が中心であり、文部科学省（2025）の「障害児・者のスポーツライフに関する調査研究」や東京都スポーツ推進本部（2025）の「障害者のスポーツに関する意識調査」などが報告されている。しかし、障害者が直接観戦する「みる」スポーツ、特にスタジアムでの観戦行動については報告例が極めて少ない。藤田（2023）は、この分野の議論が萌芽期にあると指摘している。NPO法人 AYA（2024）のインクルーシブ野球観戦企画のような実践例は存在するものの、特に車いす利用者の直接観戦においては、物理的・社会的障壁が依然として大きいとみられる。

例えば、座席について言及するならば、国土交通省（2015）はスタジアムの車いす席基準を総座席数の0.5～1%以上としているが、木島（2015）の調査ではプロ野球12球団の球場で基準を満たしていないものが多く、座席エリアも限定的である。米国ではADA（障害を持つアメリカ人法）により1%を超過した設置が多く、柔軟な利用が可能である。一方、日本では障害者差

別解消法(2024年改正)の施行に伴い、民間事業者にも合理的配慮が義務化されたが、物理的環境の整備や意思疎通に課題が残る。その中で、第3期スポーツ基本計画を受けて文部科学省(2023)はスポーツ施設におけるユニバーサルデザイン化のガイドラインを発表した。しかし「みる」スポーツの詳細は不十分で、観戦を通じた共感やつながりのベネフィットも検討されていない。これらの問題を踏まえ、本研究は合理的配慮を基盤に、車いす利用者がスタ

ジアムでの直接観戦時に感じる環境要因が感情反応に与える影響を明らかにすることを目的とする。得られた知見は、障害者の「みる」スポーツの基礎資料となり、観戦を諦めている人へのロールモデルとして機能すると考える。

第2章 研究の枠組み

本研究の理論的基盤は、障害者基本法(1993)および障害者差別解消法(2016, 2021, 2024改正)の合理的配慮を踏まえる。分析の枠組みはサービススケープのM-Rモデル(Mehrabian & Russell, 1975;西口, 2023)を援用し、スポーツ観戦者行動のキャリア、環境(ユニバーサルデザイン)、感情反応(快楽・覚醒・優位)、行動反応(接近・回避)、パーソナリティ(障害の有無)を検討した。環境要因として三菱電機デザイン研究所(2001)のユニバーサルデザイン10原則、感情反応として押見(2010)のスポーツ観戦感動尺度を採用した。そして、環境への前段階としてのスポーツ観戦者行動のキャリア形成に関しては、ヤマハ発動機スポーツ振興財団(2023)のパラアスリートキャリア7条件を援用することとした。加えて、文部科学省(2022)の調査で障害者の観戦希望はプロ野球が高いことや、霜島(2013)の「する」スポーツの参加動機が「みる」スポーツに影響するという先行研究に基づき、調査対象は車椅子ソフトボール協会所属選手とした。2025年6月14日「第4回西日本車椅子ソフトボール大会」参加者に任意の協力を求めた。無記名質問紙調査を実施し、①属性および野球観戦経験、②パラアスリートキャリア7条件を援用した7項目、③ユニバーサルデザイン10原則を援用した10項目、④スポーツ観戦感動尺度8項目から構成し、46名(障害あり18名、なし28名)から回答を得た。分析は障害の有無別にクロス集計、平均値比較、相関分析、重回帰分析(ステップワイズ法)を実施した。

第3章 結果と考察

結果として、初観戦時の同行者は障害の有無に関わらず「家族・親族」が多く(障害あり88.9%、なし75.0%)、安心感を求める身近な存在の重要性が示された。初観戦時の情報収集では、障害あり群で「ホームページ」(66.7%)や「SNS」(44.4%)が多く、アクセス・設備への不安が心理的負担となっている可能性がある。ユニバーサルデザイン10原則の評価では、障害あり群で「座席スペースは十分であった」(平均値4.33)が高く、「安全・安心に観戦できた」(平均4.22)が次ぐが、「入場後の座席までのアクセスは快適であった」(平均値3.78)は低めで、移

動面の課題が浮上した。次に、物理的環境要因と感情反応の関連を明らかにするために、ユニバーサルデザイン 10 原則に基づく 14 の質問項目と観戦感動尺度に基づく 9 の質問項目の相関分析では、障害なし群で「入場後の座席までのアクセスは快適であった」「安全・安心に観戦できた」が観戦感動尺度の多くと有意な関連があった。障害あり群では「座席スペースは十分であった」と「観戦後は元気になったと感じた」、「安全・安心に観戦できた」と「試合を観戦するのは純粋に楽しいと感じる」に強い相関が見られ、スペースと安心感が感情満足に寄与することが明らかになった。重回帰分析では、「障害のある人を観戦に誘いたい」を従属変数にユニバーサルデザイン 15 項目と観戦感動尺度 7 項目を独立変数とし、障害あり群の調整済み $R^2=0.857$ ($p<0.01$) では、「直接観戦は選手に感情移入する機会が多い」($\beta=0.595$, $p<0.01$)、「初来場者もリピーターも楽しめる工夫があった」($\beta=0.408$, $p<0.01$)、「戦術や戦略などの監督の采配に共感する」($\beta=0.336$, $p<0.05$) が正の影響、「試合を観戦するのは純粋に楽しいと感じる」($\beta=-0.443$, $p<0.05$) が負の影響を示した。障害なし群の調整済み $R^2=0.601$ ($p<0.001$) で、「チームや選手のプレーに強く心を動かされる」($\beta=0.790$, $p<0.001$) のみ正の影響を示した。これらの結果から、障害あり群では直接観戦の感情移入と包摂的工夫が他者誘引を促進するが、純粋な楽しさだけでは移動・設備の不安が障壁となり誘いにくく、障害なし群ではコアな感動がシンプルに誘う動機となることが示唆された。考察として、ユニバーサルデザインの推進は障害の有無を問わず観戦の質を向上させ、障害がある人のロールモデルも増加すると考えられる。実践的示唆としては、車いす席拡充、情報発信強化、包摂イベントの多様化が提案できる。最後に、研究の限界と課題について、本研究はサンプル数が少ない(特に障害あり 18 名)ことと主観評価に依存している。観戦回数・スタジアム別の客観データ併用、障害種別拡大、質的調査の組み合わせが今後の課題として挙げられる。以上を踏まえて、本研究は合理的配慮の実効化とインクルーシブなスタジアム文化の基盤を提供するものとなる。